

令和7年度

学校評価（自己評価）報告書

岩見沢市立光陵中学校

学校名	岩見沢市立光陵中学校							
校長名	桐渕 則行			教職員数		39名		
学年	1年	2年	3年			特別支援	合計	
学級数	5	5	6			4	20	
児童生徒数	176	194	202			17	589	
住所	岩見沢市春日町1丁目10番37号							
電話	0126-22-0037							
FAX	0126-22-3372							
URL	<a href="http://koryo-iwamizawa.sblo.jp/">http://koryo-iwamizawa.sblo.jp/</a>							

## I 学校教育目標

校訓「四つの光」	教育目標
知の光…磨かれた知性	自ら真理を求め、進んで学び、よく考える。
愛の光…美しい心情	自らあたたかな心を養い、友をいたわり、よく助け合う。
行の光…徳行と技術	自ら働く喜びを求め、責任を持って行動する。
健の光…すぐれた健康	自ら健康に関心を持ち、気力に満ちた心身をきたえる。

## II 中期及び単年度の具体的目標

### 1. 令和7年度 学校経営方針

#### 「挑戦と創造」～『つながる教育』ウェルビーイングを実現する学校づくり～

光陵中学校はこれまでの各種調査の結果からわかるように「学校に行くのは楽しい」と答えた生徒の割合が著しく低い傾向にある。特に過去3年間の全国学力・学習状況調査においては、「学校に行くのは楽しい」と答えた生徒の割合が70%前半を推移しており極めて低調である。また同調査において「自分と違う意見について考えるのは楽しい」と答えた生徒の割合についても、60%台を推移横ばい傾向にあり、他者との関わりに大きな課題があると分析している。

学校は、生活全般において、他者と関わりながら、共に学び、人間性を涵養していく重要な役割を果たすものであり、生徒が安心して学び、ウェルビーイングを実現できる場所とする必要がある。

また、何らかの理由により安心して学校に通うことができない状態にある生徒の学びの機会の保障にも柔軟に対応することが必要不可欠である。

そのためには、生徒と教師が集い、共に学び、生活し、成長する場としての学校の価値を最大化し生徒や教師が学ぶ楽しさや期待を感じながら、共に学びに向かう「人のつながり」を基盤とした取組を徹底して行うことにより、「魅力ある学校づくり」を実現する必要があると考えている。

以上を踏まえ、学校経営の基調に「『つながる教育』～ウェルビーイングを実現する学校づくり～」を据え、あらゆるつながりを生かした教育を推進することにより、誰一人取り残すことのない多様な学びを確実に保障することができるよう、次の重点を定め、学校経営を推進することとする。

### 2. 令和7年度の経営の重点

#### ア 授業改革「思考力を高める授業づくり」

##### ①「社会とつながる」教育課程の実現と改善サイクルの確立

- ・教科横断的な視点での単元計画の改善
- ・各種調査に基づくRG-PDCAサイクルの好循環

##### ② 不断の授業改善

- ・子どもが主体となる「子どもの声が響く授業」の実践
- ・生徒の「学習スキル」の育成と教師の「授業スキル(RYTK)」の獲得

※RYTK:生徒の声を「つなぐスキル」(連結・要約・追加・確認)

・先端技術を活用した探究的学習の構築

### ③学力向上を図る機会の確保

・授業の気づきから問いへと思考を深め、学びを自己調整する力を育成。

※授業、家庭学習、各種テストなどの「学びをつなぐ取組」を試行

・少人数やTTによる補足的・発展的な指導の実施

・授業終末の振り返りを充実し、次の学びに向かう力を育成。

#### 【数値目標】

全国学力調査で「授業がよくわかる」と答える生徒の肯定回答割合85%以上

## イ 心の改革「安心できる居場所づくり」

### ④道徳教育の充実

・子どものつぶやき・発言を「つないで展開」、考えて議論する道徳授業の充実

※「むりなく・むだなく・むらなく」三無主義の道徳実践

### ⑤生徒の主体性を重視した活動の充実（発達支持的生徒指導の視点を重視）

・「ピア・サポート」の理念を全教育活動に浸透し「傾聴・受容・共感」の心理的安全性を確保した学級・学校風土の醸成

・児童会と生徒会が接続し主体となった行事の試行（挨拶・いじめ根絶・選挙等の取組）

・4校の教職員が「寄り添う指導」により、4校の児童・生徒を「つないで支援」する組織体制を構築する。

（小中接続で生徒指導会議を適宜開催し、いじめなどの問題行動の未然防止や早期発見・迅速対応など、年間を通じて協働実践できる環境を整備する）

### ⑥キャリア教育の充実（小中接続の重点活動）

・「小中をつなぐ系統的なキャリア教育」の実施と職場体験学習の充実

・「ふるさと教育」や「主権者教育」の充実

## ウ 接続改革「保護者や地域の期待に応える学校づくり」

### ⑦義務教育9年間を見通した計画的・継続的な教育課程の充実

・「子どもの声が響く授業」の実現に向け、小中の実践から「つなぐ授業」づくりを創造

・外部の専門的な研究機関との「つなぐ研究」による9年間の継続性ある指導の充実

・総合的な学習の時間の接続による小中合同学習の試行

・小中合同研修会を通じた教育課程接続の研究推進「ふるさとを愛し生き抜く教育課程」

※特に道徳科・教科横断的な総合的な学習の時間の充実

### ⑧コミュニティ・エリア機能の充実

・コミュニティ・エリアで目指す理念や人材を共有し、「社会とのつながり」を重視する教育活動の充実

・光陵中学校区学校運営協議会によるコミュニティ・エリアの取組と評価の充実

・小中接続した3部会グループ構成による目的達成型の取組の試行

※3部会：授業改革グループ・心の改革グループ・接続改革グループ

【数値目標】保護者アンケートで「経営方針や教育活動を保護者や地域によく伝えることができていると答える割合」85%以上

## エ 行動改革「組織的な学校づくり」

### ⑨目的達成型の分掌組織による業務の推進と主任層を「つなぐ経営会議」の機能強化

・RG-PCDAサイクルとOODA理論による臨機応変な目的の達成

・主任層の裁量権の拡大による独自性と創造性の発揮

### ⑩働き方改革の推進

・小中「つなぐコアチーム」による「働き方改革」の企画立案と試行

- ・効率と効果に焦点を当てた業務の見直しによる教育活動の推進
- ・服務規律の徹底と教職員のメンタルヘルス
- ・初任段階職員対象の小中「つなぐメンター研修」試行による効率的な業務の推進（YML 育成）
- ・「学年（つなぐ）担任制」による教職員の持ち味（強み）をチーム力に変換する取組の試行

### Ⅲ 各種具体的な計画

本年度は、学校経営方針「挑戦と創造」～『つながる教育』ウェルビーイングを実現する学校づくり～の具現化に向け、生徒一人一人が安心して学び、自分らしさを発揮しながら仲間とともに成長できる学校づくりを推進した。

特に、全国学力・学習状況調査や校内アンケート等から見えてきた「学校生活の満足感」「自己有用感」「他者と関わりながら学ぶことへの前向きさ」に関する課題を重く受け止め、授業づくり・居場所づくり・接続の充実・組織的運営の4点を柱として、教育活動全体の改善に取り組んだ。

#### 1. 授業改革「思考力を高める授業づくり」

授業改革においては、子どもが受け身で学ぶのではなく、自ら考え、仲間と関わりながら学びを深める授業への転換を図った。

そのため、各教科において「子どもの声が響く授業」を意識し、生徒の発言やつぶやきを教師がつなぎ、学びを広げたり深めたりする授業改善を進めた。また、授業終末の振り返りの充実を通して、自分の学びを整理し、次の学習につなげる自己調整の力の育成にも努めた。

さらに、教科横断的な視点を取り入れながら、社会とのつながりを意識した学習課題の設定や、ICT機器を活用した探究的な学びの工夫を進めた。加えて、少人数指導やTTによる支援、補充的・発展的な学習機会の確保を通し、学力差への丁寧な対応にも努めた。

今後は、学習内容の定着だけでなく、「わかる」「できる」実感を生徒が持てる授業づくりをさらに進め、学ぶ楽しさの実感と学習意欲の向上を図っていく。

#### 2. 心の改革「安心できる居場所づくり」

心の改革においては、生徒が安心して過ごすことができる学級・学年・学校風土の醸成を重視した。

道徳教育では、考えを一方向的に教え込むのではなく、生徒の発言や思いを大切にしながら、互いの考えに触れ、よりよく生きることについて考える授業づくりを進めた。

また、発達支持的生徒指導の視点を重視し、PBIS、SEL、ピア・サポートの考え方を基盤に、傾聴・受容・共感を大切にしたりした関わりを全教育活動に位置付けた。生徒指導上の課題に対しては、問題対応型に偏るのではなく、未然防止と集団づくりを重視し、学級活動、生徒会活動、行事等を通して、生徒が互いを支え合う関係づくりを意図的に進めた。

加えて、小中接続の視点から、関係小学校との情報共有や支援体制の連携を進め、児童生徒理解の連続性を高める取組を行った。

今後も、「安心できる」「認められる」「相談できる」と実感できる環境づくりを基盤に、生徒の自己肯定感・自己有用感の向上を図っていく。

#### 3. 接続改革「保護者や地域の期待に応える学校づくり」

接続改革においては、義務教育9年間を見通した学びと育ちの連続性を大切に、関係小学校との接続を意識した教育活動の推進に努めた。

授業交流、情報共有、乗り入れ授業等を通して、小学校段階で育ててきた資質・能力や支援の在り方を中学校教育へ円滑につなげるとともに、児童生徒理解に基づく継続的な指導体制の構築を進めた。

また、道徳や総合的な学習の時間を中心として、ふるさと教育や主権者教育、キャリア教育の充実を図り、生徒が地域社会とのつながりを実感できる教育活動の充実にも努めた。

さらに、保護者・地域に対しては、学校だよりや各種通信、行事、学校運営協議会等を通じて、学校経営方針や教育活動のねらいを積極的に発信し、学校教育への理解と協力を得よう努めた。

今後は、教育活動の成果や課題をよりわかりやすく発信し、保護者・地域と学校が目標を共有しながら、生徒の成長

を支える体制を一層強化していく。

#### 4. 行動改革「組織的な学校づくり」

行動改革においては、教職員一人一人の力を生かしながら、学校全体として組織的・協働的に教育活動を推進する体制づくりを進めた。

特に、経営会議や主任層を中心に、目的を明確にした分掌運営を進めるとともに、状況に応じて柔軟に判断しながら改善を図る実践を重ねた。

また、働き方改革の視点から、業務の精選、分掌間の連携、ICT の活用、会議運営の見直し等を進め、限られた時間の中で教育効果を高める体制づくりに努めた。服務規律の保持やメンタルヘルスの視点も含め、安心して働くことができる職場環境の整備にも留意した。

さらに、初任段階教職員への支援や若手育成、学年を越えた協働体制の構築などを通して、組織として支え合い、学び合う学校文化の醸成を図った。

今後も、教職員の同僚性を基盤にしなが、持続可能で機動力のある学校組織づくりを進めていく。

## IV 各種評価結果と改善策

### 1. 教員評価の結果と分析

教員評価からは、学校経営方針の共有、組織的な生徒指導、学年・分掌を越えた連携、若手教員への支援などについて、一定の成果が見られた。特に、生徒理解を基盤にした指導や、課題発生時に組織で対応しようとする意識は着実に高まっており、学校全体で生徒を支える体制づくりは前進していると考えられる。

一方で、働き方改革に関わる項目、業務量の適正化、分掌事務の負担感、会議や情報共有の効率化などについては、なお改善の余地が見られた。教育活動の充実を図る一方で、教職員の多忙感が増しやすく、取組の質と持続可能性を両立させることが課題である。

また、若手教員の育成や支援体制については成果が見られるものの、指導助言の属人化を避け、学校全体として学び合う仕組みをさらに整える必要がある。

#### 改善策

- ・分掌業務、会議、提出物等の精選を進め、業務の重点化・平準化を図る。
- ・ICT を活用した情報共有の効率化を進め、会議時間や事務処理時間の縮減を図る。
- ・主任層・ミドルリーダーの役割を明確にし、若手支援と学校運営をつなぐ体制を強化する。
- ・教職員の対話を通して、学校経営方針と日常実践との接続をより明確にし、全員で改善を進める校内文化を醸成する。

### 2. 生徒アンケートの結果と分析

生徒アンケートの結果からは、学級の雰囲気、授業への参加意識、道徳の工夫、相談対応などにおいて、おおむね肯定的な回答が見られた。これは、授業改善や生徒理解に基づく日常的な関わり、安心できる集団づくりの取組が一定程度、生徒に受け止められていることを示している。

特に、授業場面においては、子どもの声を生かした学び合いの工夫や、考えを交流する機会の充実が、生徒の学習参加意識の向上につながっていると考えられる。また、道徳や学級活動、生徒会活動等を通じた心の教育の積み重ねが、学校生活の安定に寄与している。

一方で、「施設・設備」「地域とのつながり」に関する評価は相対的に高まり切らず、学校の学びや活動が地域や社会とどのようにつながっているかを、生徒が実感できる場面をさらに増やす必要がある。

また、学校生活全体に関わる満足感については学年間に差が見られ、特に中間学年において、学習面・人間関係面・進路意識等の変化が重なる時期の支援の在り方が課題として見えてきた。

加えて、全国学力・学習状況調査でも継続して課題となってきた「学校に行くのが楽しい」「自分と違う意見について考えるのが楽しい」といった項目との接続を考えると、安心感の確保に加え、対話的に学ぶ面白さや、自分の考えが認められる実感をさらに高めていく必要がある。

## 改善策

- ・授業において、生徒同士が考えを交流し、違いを認め合いながら学ぶ場面を一層充実させる。
- ・学年の実態に応じたきめ細かな支援を行い、とりわけ中間学年に対する所属感・自己有用感の向上を意識した取組を進める。
- ・PBIS、SEL、ピア・サポートの取組を全教育活動に位置付け、日常的な関わりの質を高める。
- ・総合的な学習の時間やふるさと教育、キャリア教育を通して、地域・社会とのつながりを実感できる学びを充実させる。

## 3. 保護者アンケートの結果と分析

保護者アンケートの結果からは、学校が生徒の安全・安心に配慮しながら教育活動を進めていることや、教職員が相談や連絡に丁寧に対応していることについて、概ね理解を得ていることがうかがえた。

一方で、学校経営方針や教育活動のねらい、日常の学びや成長の様子については、学校側は発信しているつもりでも、保護者に十分伝わり切っていない面が見られた。特に、取組の目的や成果が具体的に見える形で届かなければ、保護者の理解や納得感にはつながりにくい。

また、学校と家庭が同じ方向を向いて子どもの成長を支えるためには、一方向の連絡だけでなく、双方向のやり取りを意識した発信と受信の在り方が重要である。学校評価の結果を真摯に受け止め、保護者の思いや願いを教育活動の改善に生かしていく視点が求められる。

## 改善策

- ・学校だより、学年・学級通信、配信ツール等を活用し、教育活動のねらいと成果を具体的かつ継続的に発信する。
- ・学校評価の結果や改善の方向性をわかりやすく公表し、学校の改善努力が伝わるようにする。
- ・保護者が相談しやすい体制づくりを進めるとともに、面談や日常連絡を通して家庭との信頼関係を一層深める。
- ・行事や公開の機会を通して、子どもたちの学びや成長の姿が直接見える場を工夫する。

## 4. 総合考察

本年度の学校評価結果を総合的に見ると、光陵中学校では、「つながる教育」を基盤とした学校づくりが着実に進みつつあり、授業改善、生徒理解、安心できる集団づくり、組織的対応の面で一定の成果が認められる。

とりわけ、生徒アンケートにおける授業参加意識や相談対応、道徳の工夫等の評価、教員評価における組織的対応への意識の高まりは、学校全体で方向性を共有しながら実践を積み重ねてきた成果と捉えることができる。

その一方で、学校生活全体の満足感や自己肯定感、地域・社会とのつながりの実感、保護者への発信の在り方、教職員の働き方改革など、継続して改善を図るべき課題も明らかになった。

これらの課題に対しては、個別の取組を単発で進めるのではなく、授業改革・心の改革・接続改革・行動改革を相互に関連付けながら、学校全体で改善を図っていくことが重要である。

今後は、学校評価の結果をRG-PDCAサイクルの中に確実に位置付け、生徒・保護者・教職員それぞれの声を教育活動の改善に生かしながら、「学校が楽しい」「自分が大切にされている」「学ぶことに意味がある」と生徒が実感できる学校づくりを、より一層推進していく。

## 5. 次年度に向けた主な改善の方向

- ・「子どもの声が響く授業」をさらに推進し、対話的で主体的な学びの質を高める。
- ・PBIS、SEL、ピア・サポートを基盤とした安心できる学級・学校風土づくりを継続する。
- ・中間学年を含めた学年ごとの実態に応じ、自己肯定感・所属感を高める支援を充実させる。
- ・小中接続、ふるさと教育、キャリア教育を通して、地域や社会とのつながりを実感できる学びを充実させる。
- ・保護者や地域への発信を改善し、学校経営方針と教育活動への理解を深める。
- ・業務の精選と組織的運営の改善を進め、持続可能な学校づくりを推進する。

## V 学校関係者評価を受けての改善策等

学校関係者評価においては、本校が進めてきた「つながる教育」を基盤とした学校づくりについて、生徒の安心感や学校の落ち着いた雰囲気、教職員による丁寧な支援体制、小中接続を意識した取組等について、一定の評価をいただいた。特に、授業改善、生徒理解に基づく支援、保護者や地域との連携を意識した教育活動については、継続的な取組の成果が見られるとの意見があった。

一方で、学校の教育活動のねらいや成果が、保護者や地域に必ずしも十分に伝わっていないこと、生徒一人一人が学校生活の充実感や自己有用感をより実感できるような取組をさらに進める必要があること、また、教職員の多忙化に配慮しながら持続可能な学校運営を進める必要があることなどの意見もいただいた。これらの意見を真摯に受け止め、次のとおり改善を図ることとした。

### 1. 教育活動の発信の充実

学校だより、学年・学級通信、配信ツール等を活用し、学校経営方針や教育活動のねらい、生徒の成長の様子が保護者や地域に具体的に伝わるよう、発信内容と方法を見直す。単なる行事の報告にとどまらず、「どのような力を育てようとしているのか」「どのような成果や課題が見られたのか」が伝わる発信に努める。

また、学校評価の結果や改善の方向性についても、わかりやすく整理して共有し、学校と家庭・地域が目標を共有しながら子どもの成長を支える関係づくりを進める。

### 2. 生徒の居場所づくりと自己有用感の向上

学校関係者からの意見を踏まえ、すべての生徒が「学校が安心できる場所である」「自分は認められている」と実感できるよう、PBIS、SEL、ピア・サポートの考え方を基盤とした学級・学年経営をさらに充実させる。

日常の授業、学級活動、生徒会活動、学校行事等において、生徒が役割を持ち、互いに認め合いながら活動できる場を意図的に設定し、自己有用感や所属感の向上を図る。あわせて、相談しやすい環境づくりや組織的な見守りを継続し、生徒理解に基づくきめ細かな支援を推進する。

### 3. 授業改善の継続と学ぶ楽しさの実感

授業においては、「子どもの声が響く授業」をさらに推進し、自分の考えを持ち、他者の考えと比較・関連付けながら学ぶ授業づくりを進める。生徒が「わかる」「できる」「考えることが楽しい」と実感できる授業を積み重ねることにより、学校生活全体の満足感の向上につなげていく。

また、授業終末の振り返りや学びの自己調整を重視し、一人一人が自らの成長を実感できる学習過程を大切にする。

### 4. 小中接続と地域とのつながりの強化

学校関係者からは、小中接続の取組を継続・充実させてほしいとの意見もあったことから、関係小学校との情報共有や授業交流、乗り入れ授業等を計画的に実施し、義務教育9年間を見通した系統的な指導の充実を図る。

また、ふるさと教育やキャリア教育、地域と関わる学習活動を通して、生徒が学校での学びと社会とのつながりを実感できる教育活動を進める。これにより、地域の中で学び、地域とともに育つ学校づくりを一層推進する。

### 5. 持続可能な学校運営に向けた組織改善

教育活動の充実を支えるためには、教職員が心身ともに安定して働くことができる環境づくりが不可欠である。学校関係者からの意見も踏まえ、分掌業務や会議の在り方、情報共有の方法等を見直し、業務の精選と効率化を進める。

また、主任層やミドルリーダーを中心とした組織的な運営体制を強化し、若手教員の育成と支援を計画的に進めることで、学校全体として持続可能で機動力のある組織づくりを推進する。

### 6. 今後に向けて

学校関係者評価は、学校の教育活動を外部の視点から見直し、改善につなげる貴重な機会である。本校としては、いただいた意見を真摯に受け止め、学校評価の結果とあわせて分析し、教育活動の改善に確実に生かしていく。

今後も、生徒・保護者・地域・教職員の思いや願いを大切にしながら、「つながる教育」を基盤とした学校づくりを進め、誰一人取り残すことのない、安心して学び成長できる学校の実現に努めていく。

岩見沢市立光陵中学校 学校だより

岩見沢市立光陵中学校  
Tel. 22-0037



第 10 号  
令和 8 年 1 月 25 日  
発行責任者 桐淵 則行

# 光陵

《校訓「四つの光」》  
「知」の光…磨かれた知性  
「愛」の光…美しい心情  
「行」の光…徳行と技術  
「健」の光…すぐれた健康

《教育目標》  
自ら真理を求め、進んで学び、よく考える。  
自らあたかな心を養い、友をいたわり、よく助け合う。  
自ら働く喜びを求め、責任を持って行動する。  
自ら健康に関心を持ち、気力に満ちた心身をきたえる。

《中央ブロック CA スローガン》 地域・家庭・学校が Win&Win のお付き合い～学校っていいな! 地域っていいな!

## 令和 7 年度 学校評価アンケート結果から見えた本校の姿

保護者の皆様、今年度の学校評価アンケートにご協力いただき、心より感謝申し上げます。今年度は、「学校が楽しい」85%の実現をテーマに、教育活動の改善を進めました。分析の結果、学校全体への肯定的な評価は、概ね 80%前後と非常に良好な結果となりました。特に「温かい人間関係づくり」や「個性尊重・相談の丁寧さ」が生徒の学校生活の楽しさを支える基盤となっていることが明らかになりました。一方で、2年生の「中だるみ期」にみられる、一時的な評価の揺らぎなど、次年度に向けて重点的に取り組むべき課題も見えています。

この結果の詳細い内容と考察については「ハコ橋 校」主幹教諭が解説しますので、ぜひご覧ください。学校としましては、この評価を真摯に受け止め、「挑戦・創造」の姿勢のもと、よりよい学校づくりに努めてまいります。 校長 桐淵 則行

### 一 生徒・保護者の声を通して考える「つながる教育」と今後の方向性



日頃より、本校の教育活動に対し、深いご理解と温かいご協力を賜り、心より感謝申し上げます。本校では例年通り、生徒および保護者を対象に学校評価アンケートを実施し、今年度の学校生活や教育活動を振り返りました。本号では、両者の声を重ねて結果を整理し、安心感や人間関係など本校の強みとして確認できた点と、学年の成長段階により課題が表れやすい点とまとめました。次年度に向けた学校づくりの方向性をお伝えいたします。(主幹教諭:ハコ橋 毅)

### 1. 「学校に楽しく通うことができたか」 - 生徒と保護者の評価はどのくらい重なるのか



図1で示すように、学校生活全体の満足度に関して、生徒アンケート・保護者アンケートのいずれにおいても、⑩「この半年間、楽しく学校に通うことができたか」は、本校の状況を捉えるうえで中心となる指標です。図1は、この⑩(5段階評価)の回答割合を示したもので、生徒・保護者ともに「とてもそう思う」「そう思う」といった肯定的な回答が大多数を占めています。ご家庭から見ても、お子さんが前向きに学校生活を送っている様子がうかがえます。

全体平均は3.99。生徒アンケートの全体平均は4.21となりました。両者とも高い水準にあり、子ども自身の実感としての「通う楽しさ」と、家庭からの見守りとしての受け止めが概ね重なっていることが分かります。こうした結果は、本校の学校生活が前向きに受け止められていることを示すものと考えられます。

### 2. 安心感と人間関係 - 2者評価が強く一致している領域

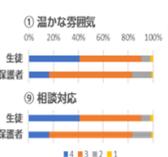


図2で示すように、生徒・保護者の評価が共通して高いのが、「安心感」や「人間関係」に関わる領域です。保護者アンケートでは、①「温かい雰囲気」は4段階評価で平均2.99、⑨「相談対応」は平均3.23と、いずれも安定して高い値を示しました。特に①は、質問⑩「この半年間、楽しく学校に通うことができた」と結びつきも比較的強く、学校生活の満足度を支える土台として働いていることがうかがえます。学校に「行きたい」と感じられる背景には、学習内容だけでなく、日々の人間関係の中で安心して過ごせる感覚があることを示す結果と言えます。

生徒アンケートにおいても、①「温かい雰囲気」(平均3.30)、⑨「相談対応」(平均3.52)はいずれも高い評価であり、学校や学級が「安心して過ごせる場」として機能していることが、生徒の声からも確認できます。困ったときに話を聞いてもらえるという感覚は、子どもが挑戦したり学び直したりするための前提条件でもあります。生徒と保護者の双方が、学校の雰囲気や相談体制を肯定的に捉えていることは、本校が大切にしてきた「つながり」を基盤とした学校づくりが、日常の学校生活に着実に根づいていることを示しています。

加えて学年別に見ると、①「温かい雰囲気」は生徒では3年生で最も高く、保護者も概ね高水準です。一方で2年生では保護者①がやや低めで、成長段階に伴う揺らぎがうかがえます。ただし⑨「相談対応」は生徒・保護者ともに各学年で高い水準を維持しており、支えを得られる安心感が確保されていることがうかがえます。今後も、日常の関わりや相談の場を学校だより等でお伝えし、安心感の土台をさらに確かなものにしていきます。

### 3. 学習に対する見方の違い - 生徒と保護者の評価がずれる場面

生徒アンケートと保護者アンケートを重ねて見ると、安心感や人間関係のように評価が重なりやすい領域がある一方で、学習への向き合い方(主体性・前向きさ)については、受け止めの違いが見られます。表1で示すように、⑥「主体的に授業に参加している」では、生徒の平均値は1年生と2年生が概ね同水準で、3年生が高い値を示しています。学年が進むにつれて授業の見通しが立ち、自分の学び方が整ってくることで、「授業に主体的に関わっている」という実感が高まりやすいことがうかがえます。

Table 1: Comparison of student and guardian evaluations for learning-related items across grades 1, 2, and 3.

一方で、生徒は授業の中で「分からなさ」や「不安」、周囲との比較を直接感じるため、自己評価がその時々で状態に影響されやすい面があります。これに対して保護者の評価では2年生が相対的に低めとなり、学年差が生徒よりはつきり見られます。家庭からは授業中の細かな様子が見えにくいことではありますが、2年生では学校生活への慣れが生まれる時期でもあり、集中の持続や学習のきまりといった面で、整え直しが必要となる場面が見られることが、家庭の受け止めにも影響している可能性があります。

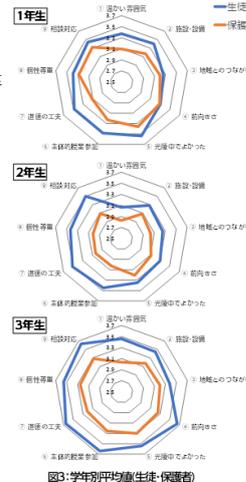
このような「ずれ」は、どちらが正しいということではなく、立場によって見えている場面が異なることから生じる自然な差です。学校としては、特に2年生の学習の姿勢づくりを大切にしながら、授業の中で「分かった」「できた」と実感できる機会を増やし、「学ぶ楽しさ」につながる授業改善を進めてまいります。

### 4. 学年の成長に沿って見えてくる学校生活の様子

学年別の平均値(生徒・保護者)を比べると、本校の強みや、成長の過程が学年の発達段階に沿って見えてきます。図3は、学年別に主な項目の平均値を整理したもので、全体としては3年生の値が高く出る傾向が見られます。3年間の積み重ねの中で、授業や行事の意味付けが深まり、教職員との信頼関係や見通しのもとで、自分の学びや生活を整えようとする姿が育ってきていることがうかがえます。

2年生は、1年生・3年生と比べると多くの項目がやや低めに出ていました。ただし、数値自体が大きく落ち込んでいたわけではなく、普遍的な水準を保ったうえで小幅な変化です。この時期は、心身の成長に伴い自立心が強まる一方で、自分や周囲への見方が厳しくなり、評価が揺れやすい学年段階でもあります。学校としては、学級の安心感を土台にしながら、小さな成功体験を積み重ね、前向きさや自信につながる支援を一層丁寧に行っていく必要があると捉えています。

また、全体としては生徒の平均値が保護者より高く出る項目が多く見られました。これは、学校の中で日常的に経験していること(授業での工夫や相談場面など)が、ご家庭には見えにくい面があることも関係していると考えられます。今後は、学校の取り組みや子どもたちの成長の様子をより伝えるよう、発信の工夫を重ねながら、生徒・保護者・学校が同じ方向を見て歩めるよう努めてまいります。



### 5. 学年の進行に伴う学校生活の感じの変化

図4で示すように、昨年度と今年度の保護者アンケートを、同じ学年集団として縦断的に見比べると、学年の成長段階に応じた特徴的な変化が見えてきました。単年度の平均値だけでは捉えにくい「時間の流れ」の変化が、家庭からの視点としてのうらに表れているかを把握できる点が、コホート比較の大きな意義です。

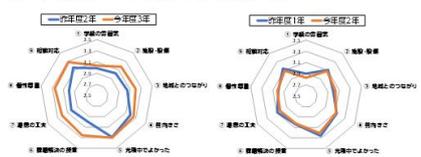


図4: 昨年度・今年度 保護者回答コホート比較

昨年度1年生から今年度2年生へと進級した学年では、いくつかの項目でくわすかな評価の低下が見られました。「学校の雰囲気」「授業への取り組み」「相談のしやすさ」などが小幅に下がっており、学校生活が安定し始める時期に特有の「揺らぎ」がうかがえます。2年生は、学校生活に慣れて自分なりの考えを強くもち始める一方で、友人関係の広がりや集団の中で立ち位置の変化も起こりやすい時期です。こうした日常の様子や言動の変化が見えやすくなることもあり、こうした日常の様子や言動の受け止め方も反映されたものと考えられます。ただし、いずれの項目も肯定的な水準を保っており、学校生活が大きく不安定になっていないというより、成長過程の中で現れやすい自然な変化の範囲と捉えています。

昨年度2年生から今年度3年生へと進級した学年では、ほぼすべての項目で評価が高まる結果となりました。特に学習や人間関係に関わる項目で伸びが見られ、3年間の積み重ねの中で教職員との信頼関係が深まり、子どもたちが「認められている」「成長している」と実感できる場面が増えていることが表れ受け止めています。3年生では、進路を意識する中で目標が明確になり、授業や行事への取り組みにも前向きさが表れやすくなる時期です。加えて、学校生活全体への満足感や、困ったときに相談できる安心感についても評価が高まり、進路を見据えた丁寧な関わりが家庭からも評価されていることがうかがえます。こうした上昇は、日常の声かけや承認、学級・学年での支え合いが積み重なった成果とも言えます。

このように、保護者アンケートの結果から、子どもたちの発達段階に応じて感じ方や評価が自然に変化していることが分かります。次年度に向けては、とりわけ2年生段階で現れやすい「揺らぎ」を前向きな成長の機会と捉え、学習規律と集団の落ち着きを整えながら、小さな成功体験を積み重ねる支援を一層丁寧に進めていきます。本校の強みを土台に、子どもたちが学年の節目を越えて安心して成長できる学校づくりを、今後も継続してまいります。

### 6. 生徒・保護者の声から見た今後の方向性

生徒アンケートと保護者アンケートを総合すると、本校の強みや、安心感のある人間関係、相談しやすい環境、そして学年を通じた成長の積み重ねにあることが改めて確認できました。とくに「温かい雰囲気」や「相談対応」に関わる項目は2者とも高い評価が見られ、子どもたちが学校を「安心して過ごせる場」と感じられていることが、家庭からの視点としても裏付けられています。こうした土台があるからこそ、子どもたちは挑戦したり、失敗から学び直したりすることができ、学校生活の満足感につながっていくと考えられます。

一方で、学習への向き合い方(主体性・前向きさ)については、学年によって受け止めの差が生じる場面があり、とりわけ2年生段階では集中の持続や学習のきまりを整える必要性が示唆されました。学校としては、こうした特徴を成長の過程として受け止めて、学習への見通しと達成感が得られるよう支援を重ねていくことが重要だと考えています。次年度に向けては、①安心感を土台にした学級・学年づくり、②短い見通しと達成感を積み上げる授業づくり、③努力や成長を言葉で認める関わり、④家庭と学校の情報共有の充実を柱として取り組みます。生徒自身の実感と保護者の見守りがより重なり、子どもたちが「学ぶ楽しさ」と「成長の手土産」を感じられる学校づくりに進めてまいります。

### 7. おわりに

学校評価アンケートは、数値の高低を比べるためだけのものではなく、生徒と保護者の声を重ね合わせ、よりよい学校づくりにつなげるための大切な手がかりです。本年度の結果から、本校が大切にしてきた「安心感のある人間関係」や「相談しやすい環境」が、子どもたちの学校生活の満足度を支える土台となっていることが確認できました。

また、学年の進行に伴い感じ方が自然に変化していく様子も見られ、成長段階に応じた揺らぎが生じやすい時期があることも分りました。学校としては、こうした変化を丁寧に受け止め、授業改善と生徒支援を通して、落ち着いて学び合える環境づくりと成長実感の積み重ねにつなげてまいります。

いただいた声を大切にしながら、家庭と学校がつながって子どもたちの成長を支えらるよう努めてまいります。引き続き、ご理解とご協力をよろしく申し上げます。

別表: 生徒・保護者アンケート質問項目  
[質問①] 思いやりや相互理解のある学級風土(学級の温かい雰囲気)  
[質問②] 安全性や整備の行き届いた環境(施設・設備の整備状況)  
[質問③] 地域協力や学習環境の活用(地域とのつながり)  
[質問④] 学習・行事・生徒会などへの積極的参加(学校生活への前向きな姿勢)  
[質問⑤] 光陵中の生徒であることへの肯定感(学校満足度)  
[質問⑥] 自ら考え、答えを共有できる授業スタイル(主体的な授業参加)  
[質問⑦] 生き方を学ぶための道徳授業の工夫(道徳の教員工夫)  
[質問⑧] 生徒の性格や考え方を理解し伸ばす姿勢(個性尊重の指導)  
[質問⑨] 生徒の悩みに親身に応じる教員の姿勢(相談対応)  
[質問⑩] 楽しく学校に通うことができた(学校生活の充実感)  
(生徒・保護者とも①~⑩は4段階評価、⑨⑩は5段階評価)

## ★ 2月行事予定 ★

- 2日(月) 1年スキー授業(1・0・2組) 学費引落日(1)⑤
- 4日(水) 全学年学力テスト
- 5日(木) 1年スキー授業(2・3組)
- 6日(金) 1年スキー授業(4・5組)
- 10日(火) 公立高校推薦入学生面接日 S C来校
- 11日(水) 建国記念の日
- 12日(木) スキー授業予備日
- 13日(金) スキー授業予備日 私立入試A日程
- 14日(土) 私立入試A日程
- 16日(月) 通級面談週間(～20日)
- 17日(火) 私立入試B日程
- 18日(水) 私立入試B日程
- 20日(金) 1・2年後期期末テスト
- 23日(月) 天皇誕生日
- 24日(火) 全協常任委員会⑨(反省) S C来校
- 26日(木) 学費引落日(スキー)① 参観日・保護者会
- 27日(金) ※駐車場が確保できなかったため、

### ◆ 令和 7 年度第 7 回卒業証書授与式について ◆

本年度の卒業式を3月12日(木) 9:00より挙行いたします。本年度の卒業式は、久しぶりに在校生全員が参加する形で実施いたします。卒業生のこれまでの歩みと新たな門出を、学校全体で祝福し、心に残る式となるよう準備を進めております。

卒業生の保護者の皆様におかれましても、ぜひ会場にお越しいただき、お子様の成長の節目をともに見届けていただければ幸いです。なお、2月に正式な案内を配付いたします。